Ⅱ. 表現意欲を高めるための英語指導

――中学２年　創作文指導を通して――

鈴　木　克　彦

1. は　じ　め　に

中学２年生ともなると，学習事項が格段に多くなり程度も高くなるため消化しきれなくなって，英語学習への興味を失う者が次第に多くなる。そのため，１年生のころに持った，自由に英語を話したり書いたりすることができるようになりたいという願望は，並大抵の努力では実現できないと感じて，英語学習への努力を怠ってしまいがちだ。

このような現状にある中学２年生を抱えて，彼等が一年前に描いた願いである英語を自由に操れるようになりたいという夢をいつまでも抱かせ，その努力を惜しまない心を育てたいと考えた。

2. 創作文指導のための実態把握と分析

(1)　生徒側にある創作文を書くことの問題点

成績上・中・下位群の中から10名の者を抽出し，面接による調査をした結果，次のようなことが分った。

項　　目	成績区分		
	上位	中位	下位
a．習った英語で自由に書けたらよいと思う。	◎	◎	◎
b．今まであまり書いたことがない。	○	◎	◎
c．何を書いてよいか分からない。	×	○	◎
d．習っていない英語を使う必要性が出てきて，書き進められない。	△	○	◎
e．単語や文法の学習で手一杯で，取り組む余裕がない。	△	○	◎
f．難しそうなのでやりたくない。	○	◎	◎

◎　強く思う　○　そう思う　△　あまり思わない
×　まったく思わない

これらの事柄を総合的に判断すると，生徒は創作文にチャレンジしてみたいという願いはあるが，できそうにないという条件が，始める前に余りにも見え過ぎて経験する事がなかったと言える。

そこで，生徒が創作文を書くことに対して困難を感じている事を，少しでも緩和してやり，意欲的に創作文に取り組めるようにするために，次のような指導上の留意点を設定した。

①　特に成績中位・下位生徒にある創作文を書くことに対する不安を取り除くために，伝達する内容に重点を置き，多少の語句や文法の誤りには教師は寛容な態度で接する。そのために，誤りを恐れず出来るだけ多く，各自が実力に応じた英語で，伸び伸びと書くように生徒に指示する。

②　何を書くかについては，事前に生徒の関心のあるTopicsを調査し，教科書題材や言語材料との関連からTopicsを決め，さらにいきなり創作文を課題とするのではなく，日常の授業に創作文に至るまでの段階的指導を取り入れる。

③　習っていない英語表現を使用する必要が出てきたときは，a）英語で表現できない事柄を絵で表わさせる　b）Topicsに沿った英語表現を予め与えておく　c）和英辞典を使ってもよい　などの手立てを教師が施す。但し，c)については，中学生段階では，不適切な英語を選ぶ可能性が高いのであまり推めない。

基礎・基本を養う学習活動も怠らないように留意する。日頃の授業の積み重ねと創作文指導との関係が稀薄にならないように配慮する。

(2)　教師側にある創作文指導の問題点

a　（授業時数の観点から）時間的ゆとりがない。

b　作品処理が繁雑である。

c　遅進生徒にとっては，基礎・基本の習得に時間をかける事の方が重要であり，創作文に取り組ませてもあまり期待できないし，意味がないのではないか。

これらの問題点に対して，次のような観点から，問題解決の糸口を見出したいと考えた。

第一に，時間的な問題については，指導内容の扱いに軽重をつけ，年間指導計画の中に明確な位置付けをすることで，時間を見出す。

第二に，作品処理については，語法上の誤りをすべて訂正してやるのが主眼ではなく，書かれた内容について教師の率直なコメントを書き加えるだけである。こういうやり方で作品を見ることを予め生徒に伝えておく必要があることは言うまでもない。

第三に，創作文を書かせる意義について，特に遅進生徒にとってどのような意味があるのか追求しておく必要がある。

遅進生徒は語い・文法の力が劣っているのは否めな

いが，Communicationの能力や関心がないとは必ずしも言い切れない。むしろ，英語がCommunicationの手段であることを実感させる授業は，彼等の学習意欲を喚起させるのに有効な手立てであると考えた。

彼等に創作文を書かせれば，恐らく誤りの多い英語になるであろうが，彼等が一生懸命に書いた英語であれば，『正しい英語への過渡期』として教師は是認してやり，その後に正しい英語を示すことが重要である。これは「(1)生徒側にある創作文を書くことの問題点」で述べたように，誤りを恐れず出来るだけ多くの英語で，伸び伸びと書くように生徒に指示することと共通することである。

以上，創作文指導に関して，生徒側の問題点及び指導上の問題点を分析し，指導の在り方や留意点を明らかにしてきた。

そこで，今後の指導上の基本方針を次のように設定し，具体的指導について詳述して行きたい。

> 語句，文法上の誤りには，教師は寛容な態度で接し，伝達したい内容に重点を置いた創作文の指導を取り入れて，英語で自己表現する喜びを味わい，意欲的に創作文に取り組む生徒を育てたいと考えた。

3. 指導方法（創作文に至るまでの指導段階の工夫）

「何でもよいから自由に書きなさい。」という課題の与え方では，「2.創作文指導のための実態把握と分析」の生徒の実態のような状況に陥ってしまうので，完全な自由英作文を書かせるまでに，段階的な指導を工夫する必要がある。

(1) 「書く」ことの基本となる学習活動

創作文を書かせるときは，教師は誤りには寛容な態度で接し，伝えたい内容に目を向け，生徒が英語を使ってみようという意欲を起こさせることが主眼となるのだが，一方で「書く」ことの基本となる学習活動をきちんとさせる指導も怠ることができない。

「例」＊書写（速く，正確に，読みやすく書けるよう）
＊聞取った英語を書く（誤りなく正確に書けるように）
＊単語の小テスト（正確な綴りで書けるよう）
＊ワークブック＜市販＞（文法・文型など誤りなく覚えるように）

(2) 表現に注目させる指導

聞く・話す・読むの学習活動をさせる場合でも，創作文を書かせるために，「どのように表現しているか」に注目させることができる。

「例」＊Oral Introductionの中に，英問英答を取り入れる。
＊Tape Listeningの途中で，What did he (she) say？と言って，テープを止めその一文を言わせる。
＊新出単語の用法を理解させるために，発音練習で使うフラッシュカードの単語を品詞によって色分けをする。（中２の２学期までは，動詞を赤，その他を黒。３学期からは，名詞を黒，副詞を緑，形容詞を青。）重要と思われる単語は，それを使った英語の問を教師が発し，英語で答えさせ，用法に慣れさせる。
＊前時の復習として，ピクチャーカードをみせながら本文の内容について教師が英語で質問し，その問いを書きとらせ，その答も各自で書かせる。

(3) 部分的創作文の指導

完全な自由英作文を中２の４月の段階からやらせるのは無理がある。語いや文法だけでなく，文章の構成や形式なども教科書題材から学ぶべきである。

「例」＊教科書の自己紹介文を自分に置き換えて書かせ口頭で発表させる。
＊題材の書かれていない部分を想像させて書かせる。
＊文と文をつなぐことばに注目させ，身近なことや想像したことを書かせる。

これらの指導段階を経て，夏休みの課題として日記形式の自由英作文を書かせることにした。

4. 指導実践報告―抽出生徒作品を中心に―

(1) 自由英作文の前段階としての部分的創作文の指導

ア．自己紹介文

教科書の文をもとに，自己紹介文を作らせてみた。名前，住んでいる場所，学年など書き込むと，文例に即した文章が出来上がるプリントを用意し取組ませた。出来上がった作品は口頭で発表させた。その際，書き込んだところは見えないように隠させたので，ときどきことばにつまることもあったが，自己紹介文の形式には慣れたようだった。

また，このプリントではさらに付足して書けるようにもなっており，画一的な内容に陥入らないように留意した。

＜考察＞

単語の綴りの誤りは下位生徒ほど多いが，どの生徒も自己紹介文の形式をよく理解して書いている。「２更に付足して書きたい事」では，上位生徒ほど多く書こうとしている。英語でもっと表現しようという意欲

Ⅱ　表現意欲を高めるための英語指導

＜自己紹介文の生徒作品例＞

成績区分	上位		中位		下位	
項目　名前	T（男）	Hi（女）	N（男）	Ha（女）	M（男）	K（女）
1.自己紹介文を作ろう						
My name is	Eiich T.	Masae H.	Masanori N.	Miho H.	Kenji M.	yumiko K.
I live in	Mizuho-ku	Naka-ku Nagoya	Nakagawaku	Nakagawaku	Tenpaku ku	Meito-ku@
I am	thirteen years old.	a junior high school student	a junior high school student	junior high school student	junior high school student	junior high school student
I am in	the eighth grade.	the eighth grade.	the eighth grade.	the eighth grade.	the eighth grade.	the eighth grade.
I go to school from	Monday to Saturday.	Monday to Saturday.	Monday to Saturday.	Monday to Saturder.	Monday to Saturday.	Monday to Satuday.
I am taking	ninth subjects this year.	nine subjects this year.	ten subjects this year.	nine subiects this year.	nine subjects this year.	eighth subjects this year.
I like	history, geography and Japanese.	English, history and Japanese.	science.	history teacher.	English.	history and Japanese.
I don't like	mathematics very much.	mathematics very much.	English and fine arts.	history.	Japanese.	English and mathematics.
2.更に付足して書きたい事はあるか。	I usuary listen to the radio. I like Katuhiro Kobori, Norio Tsubol, Hidesi Ito and Kazune Tomita.	数学は代数は好きだけど，幾何が嫌いです。将来は通訳になりたいです。I like basketball and volleyball	I like music. I like movie.	いちばん最後の所 I don't like history の所をはじめにBut をつけてBut I don'tlike history.とする。	I like baseball	な し

がみられる。下位生徒はここにあまり書いていない。例えば，下位生徒のK女などは英語が嫌いなせいか，この欄には大きな文字で「なし」と書いてあった。

ところが，「3英語で書けない事を絵で表す」欄には，反対に下位生徒ほど多く書いてあり，上位生徒では「ありません」とする者が大半であった。

イ．教科書題材の書かれていない部分を想像して書く

Lesson 1では，Mikeが誰か他の人と話をしている。その話の内容をよくつかんだ上で，その後どんな事が話題になったか想像させ，会話文を書かせた。また，その場面がよく分るように，絵や図で表させた。前述の自己紹介文を書いた生徒の作品で考察したい。

＜T男：上位生徒＞

What subject do you like ?
　I like history, mathemasics and science.
Do you like school ?
　Yes, I do.

＜Hi女：上位生徒＞

Can Fred play basketball, too ?
　Yes, he can.
Does he like it ?
　Yes, he does.

＜N男：中位生徒＞

Where is picture of my teachers.
Who is this, Mike ?
It is Miss Lemay.
Her is our French teacher.

＜Ha女：中位生徒＞

teacher : What animals do you like, Mike?
Mike　: I like dogs, birds, koalas, and horses.
teacher : Do you like pigs ?
Mike　: No, I dont like pigs very much.

＜M男：下位生徒＞

Are you as tall as Mike ?
　Yes, we are. I am as tall as Kathy.

＜K女：下位生徒＞

M : I has a dog.
N : Is that dog is white or a black
M : It is black.
N : I has two tennis rackets.

Mikeが友人やバスケットボールについて，誰かと話している場面である。T男やHi女はそれをうけて教科やひき続いてバスケットの話題で会話を進めている。N男やHa女は前の話題とかけ離れた会話になってしまった。M男は習ったばかりのas～asを一生懸

命使ってみたが，意味不明の会話になってしまった。K女は場面を無視して（K女の絵から）書いてしまったし，誤りも多い。

T男，Hi女，N男，M男は，絵が得意でないせいもあり，図や文章で場面を説明した。K女，Ha女は絵が好きなため細かく描いてきた。K女，M男は教科書本文の意味が理解できなかったのか，場面の説明が違ったものになってしまった。

場面をしっかり押えた指導が足りなかったようだ。また，この課題に取り組んでいる時間は，集中的に下位生徒の指導に当たるか，上位生徒と組ませてグループ学習させるなどしてもよかった。

ひしゃくがどう変化していったかまとめてみよう。
（A）～（C）に適する文を下から選び，書きなさい。
At first the girl's dipper was _____.
(A) _____.
Next she _____ the dipper _____.
Then (B) _____.
The dipper _____.
At last it _____.
because (C) _____.

She gave a little dog some water.
She went into the woods with it.
She gave an old man some water.

注　give gave ～に－を与える
because なぜなら

文章を時間を追って書くとき，at first, at last,next, then　なども便利です。下はそれらを使って書かれた文章です。これらを参考に君たちも書いてみよう。

I like soccer very much.
At first I didn't play soccer very well when I was an elementary school boy. I wanted to play soccer very well.
Then I went to junior high school. I played soccer very hard.
At last I can play soccer best of all.

どんな話題で書きますか。

How many words did you use? [　　] words.

ウ．文と文をつなぐことばに注目して書いた文

Lesson 5 The Big Dipperでは at first, at last , next, thenなど文の流れをスムーズにすることばがいくつか出てくる。これらの用法の定着を計るプリントを作成し指導した。

書く内容は事実でも想像でもどちらでもよいとしたが，まとまりのある文章を書くのは初めてだったためか，書きにくかったようだ。

＜N女の作品＞

At first when I was in the eighth, I didn't like English. Then I studied English very hard this year. Because my firends live in America. At last I can speak English and like Engkish.

＜T男の作品＞

At first I walked to Horita Station. Next I took the train of Meijo Line. Then I get off a train to change trains of Higashiyama Line at Sakae Station for some time. I get off a train at Motoyama Station, I walked to my school. At last I arrived my school.

(2)　自由英作文の指導

ア．旅について書いた文

接緑詞のwhen，動詞過去形を指導した後，これまでに経験した旅行について創作文を書かせた。過去形を学習したことで表現の幅がこれまでに比べぐっと増すと思われたので，指示や統制を最少限にして，できるだけ自由に書かせた。

また，繰りや文法の正確さなど日頃の授業では最優先となる事柄はまったく要求せず，伝えたい内容が分りさえすればよいとした。いつもとは指導の目的が違うことをはっきりさせるために，この種のプリントに「ENGLISH IS MY WORLD」と名前を付けた。

＜プリントの指示＞

Write about your trip in English.
You can draw a picture to say something about your trip. Use the words like "When I was ____ years old or when I was in the ___ th grade. Write as many English as you can.

（プリントの最後に）

How many words did you use ? [　　] words

主題の「旅について」だが，比較的多数の生徒が関

心を持っており，ハイキング，遠足，修学旅行，自転車での遠乗りなど何でも少し遠い所へ行ったことなら構わないとしたので，すべての生徒が経験したことを書けた。

Whenで書き始めることで，経験したことをひき出しやすくしようとした。しかし，実際に書いてきたものを見ると，Whenを使っていない者がかなりいた。説明のときは日本語で言ったのだが，プリントの中の指示が英語だったので分らなかったのかもしれない。

語数についてだが，ここでは文章にまとまりを持たせるとか要点を押えて書かせることも要求せず，むしろ冗長な表現でも学習した英語を出来るだけ多く使ってあるほどよいことにした。そこで，プリントの最後に何語使ったかを書かせる欄を設けた。

次に生徒の書いた文章をもとに考察をしたい。

＜T男の作品　100語＞

When I was ten years old, I went to Fukuoka. I only went to there in the summer vacation. I lived in there from August 1 to August 22. I wanted to go there by the "Blue Train." But, I went by plane. Because the train was full. The day was very hot day. There was my uncle and aunt's house in Fukuoka. The trip went Izuka and Shimabara, too. In Izuka, there was my grandmother's house, and in Shimabara was my uncle's brother's house. I was very happy to go to Fukuoka. I am going to go to Fukuoka.

＜K女の作品　30語＞

I want to Nagano with my family. sky is my hobby. But I like sky, though. my little brother is drive in a sled. he doesn't like sky very well.

T男は福岡へ一人で出掛けていったことを書いた。上位生徒にしてはミスが多いようだが，大意は十分読み取れる。「一人でよく行けたね。ブルートレインに乗れなかったのは残念。」というコメントを書き添え返却した。

下位生徒のK女になると，語数が少なくなり，誤りも甚だ多く，文意も分かりにくい。skyは恐らくskiの誤りだろう。だとすれば，家族で長野へ行き，自分はスキーは好きだが，弟はあまり好きじゃないということが書きたかったのだろう。そう解釈した上で，教師の短いコメントを付して返却した。

上位生徒ほど語数が多く，まとまりをもった文章が書ける。誤りは自由英作文という形式で，「誤りを気にせず書く」という指示のため上位生徒でもかなり多いが，ほとんどの生徒が一つの話題を追って書いていたところから，英語を使って書こうという意欲は見られる。

イ．夏休み中のことを書いた文

「ENGLISH IS MY WORLD」プリントを夏休み前に一人3枚ずつ渡し，夏休み中にあったことを英語で書かせてみた。

＜プリントの指示＞

夏休み中のこと（旅行，遊び，スポーツ，学習，食事，趣味など何でも）を，できるだけたくさんの英語で書いてみよう。

◎　3日分（3枚）書きなさい。ただし，そのうち1枚は林間学校について書くこと。

◎　過去形の動詞を使いなさい。

◎　英語で表しきれない事柄は，絵で表しなさい。

そのほか口頭で与えた指示として，「間違ってもよいし，多少文のつながり具合がおかしくても構わないから，できるだけ多くの英語を使って，伸び伸びと書きなさい。これは普段の授業と違って，英語をともかく使ってみようという意欲があるかどうかが肝腎です。」という指示を与えておいた。

普段の授業と違い「ENGLISH IS MY WORLD」プリントは一生懸命書いてあるかどうかが問題だと，日頃から言っているので，生徒は矛盾（普段の授業では正確さが求められるのに，このプリントでは誤りが許される）を感じることはなく，むしろ誤りを恐れず授業で習った語をフルに使ってみようという気持ちになれる。

次に，生徒の書いた作品とアンケート調査の結果をもとに考察を加えたい。

①　生徒の書いた作品の考察

＜T男の作品＞

I went to Mt. Ontake by train in July 23 to 24. I went to there with my grandmother and her acquaintances. We took the 10:30 a.m. for Nakatsugawa train at Nagoya Station.

Then as soon as arrived Nakatugawa, we changed next train for Matsumoto. We got off the train at Kiso Fukushima at 13:01. We are lunch in front of the station.

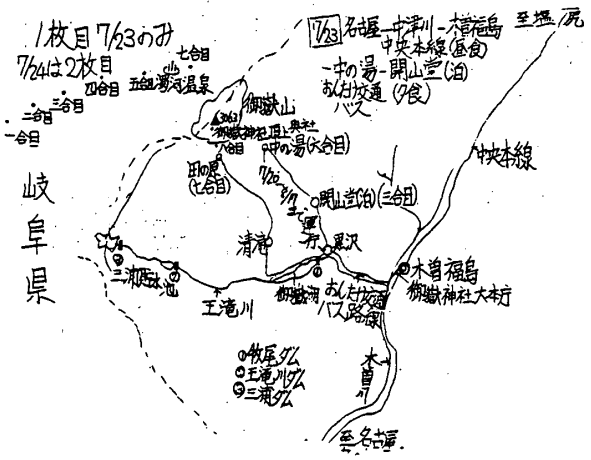
Then we got on a bus at 13:48. We rode in the bus for Nakanoyu. The bus ran on a mountain path. We arrived there as 15:10, but the last bus started from there at 15:35, so we only visited the shrine.

We got off the bus at Kaisando. Then we visited our graves.

We put up at an inn " Kaisando" tonight, but I didn't go to sleep. Because it was very

cold. So I sometimes went to a toilet. I catched a cold.

以下省略



成績上位のT男は列車マニアで，一泊二日で木曾福島へ友人と出掛けた思い出を書いた。3枚のプリントのうち2枚をこの話題で書いた。合計301語も書くことができた。他の生徒が50〜80語ぐらいで書いているのに比べ，非常に多い。本文中に多くの地名が出てくるので，分かりやすいように地図を書く工夫がみられる。

しかし，上位生徒にしては誤りが多く，arrive, eat start, visitなどの連続でだらだらした文章になってしまった。書く内容を整理すれば，もっとすばらしいものが出来たのではないか。勿論，この「ENGLISH IS MY WORLD」はそれを目標としていないので，T男の文章はこれだけで教師の期待した結果を十分に満たしているといえる。ただ，力のある生徒には，もう一段上の目標をもたせてもよかった。　さらに，これは指導の手落ちかもしれないが，パラグラフごとに分けて書くことが出来ていない。（本文は筆者が段落化した。）ほぼ全員が出来ていない。英語的発想で段落を設けることは中学生には難しいかもしれないが，一言でも言って置いたら，T男の文章ももっとよいものになっていたかもしれない。

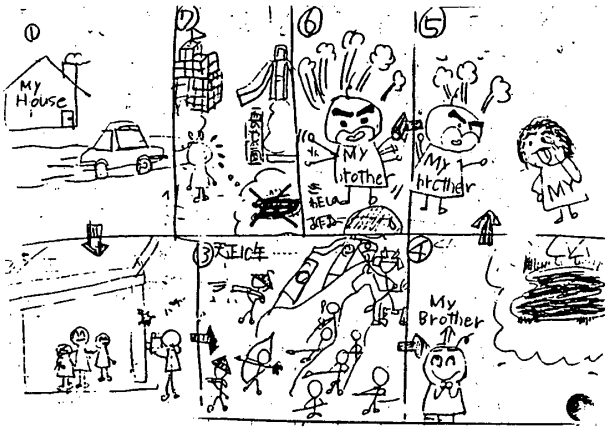
＜K女の作品＞

I was in Nagakute an ancient battle field yesterday. My parents and my little brother were there, too. But my grandmother and grandfather were not with us. We went there by father's car.

"I wanted to go to the blood pond." said little brother. But I sided against him. "I want to go, "said little brother. "I can't be helped. Let's go." said I. We went on a blood pond.

We began looked for the pond, but I could not find it. At last we got to the pond. But there has a park.

We are go home. Little brother heart is still on the blood pond. But I had a good time day.



成績下位のK女は，授業中おとなしいが，絵や手紙を書くなど英語にあまり興味を示さない。本文も誤りが多く読みづらいが，イラスト入りで楽しくしかも一生懸命書いている。これをどう評価するかが「ENGLISH IS MY WORLD」を使った指導の最大のポイントになると言える。

長久手の古戦場へ家族と出掛け，弟が「血の池」という戦跡に興味をもち見に行ったが，今は公園になっていた。弟はいつまでもそれが心から離れないようだ。Little brother's heart is still on the blood pond. という英文が印象的である。

使用してある英語を見ると，出だしの祖父母のことについては，Lesson 2 Mike Was in Japan Last Yearの，途中の「血の池」の部分については，L 5 The Big Dipperの表現を使ってある。誤りが多いとは言え，自分の経験したことを，習った英語で精一杯書こうという姿勢が見られる。テストの答案を採点する目で見れば，とても高得点を得られそうもない文だが，英語を使ってみようという意欲があるかという観点から見れば，満点をやってもよい文章である。勿論この背景には，こういう意欲があれば，今はできなくても，生徒は英語を学ぶことに励み，近い未来に適切な英語で書けるようになるだろうという見通しを教師側がもっていることがある。

② アンケート調査の結果の考察

夏休みの課題提出時に，ＡＢ両組合わせて84名を対象にアンケート調査を行なった。

ア．夏休みの課題で困ったことは何か

a）	まとまりのある文章にできなかった	54.8%
b）	習わない語を使わねばならなかった	46.4%
c）	書く話題を捜すのがたいへんだった	36.9%
d）	和英辞典をひくのがたいへんだった	30.0%
e）	多くの英語で書けなかった	23.8%
f）	その他	4.8%

文章にまとまりをもたせる指導はしていないから，まとまりをもたせることに苦労したという感想は当然予想された。文章にまとまりをもたせる必要性を生徒達は今感じ取っている。これを大切にしてやりたい。

自由英作文を書く場合，習わない語句を使わざるをえないことはありうる。辞書指導はしなかったが，よく調べてあるものもあった。

23.8%の生徒があまりたくさん英語を書けなかったとしているが，裏返してみると73.8%の生徒は出来るだけ多くの英語で書けたということになる。本指導の目標はほぼ達成されたとみてよい。

イ．夏休みの課題で，絵をかいたか

絵をかいた生徒　67.9%

前任校で「英語の絵日記」を３年生で指導したことがあった。（本校紀要　第31集）このときは，提出者の100%が絵をかいてきた。本校生徒はあまり絵をかくことに熱意はなさそうである。「絵をかくのが苦手」という生徒もいるのも確かだ。絵はあくまで表現の補助手段として使っていきたい。

5. 反省及び今後の課題

① 指導の有効性

ア．英語を書く意欲を育てられたか。

夏休みの課題では50〜80語で書く生徒が最も多かった。一番少ない生徒でも30語ぐらいで書いてきた。１枚当りにかけた時間は，１時間ぐらい。20分で出来てしまう者もいれば，３時間以上もかけ書いた者もいた。書く量や時間は個人により大きく違う。

しかし，大部分の生徒はじっくり腰を据えて書けたようだ。８割近くの生徒が，出来るだけ多くの英語で書けたと考えている。

イ．創作文で誤りに対して教師は寛容な態度で接することができたか

創作文を書く目的を生徒に明らかにしておいたので生徒は添削されずに返却されたプリントを見ても，変だと思う生徒は一人もいなかった。但し，書かれている内容に対する教師のコメントは１枚１枚に書いた。例えば，「（林間学校では）肝だめしはそんなに怖かったですか。なかには笑いっぱなしという人もいたけどね」「春日井まで自転車で出掛けたとは驚いたね。春日井の町や神領の田舎っぽい風景がよく分る文が書けました。」「（家族で行った）高野山の夏は涼しいですか。絵から察するとバスで行ったのかな。」など，一切誤りには触れなかった。ただ，日常の授業では間違いはその場ですぐ訂正するようにしている。

ウ．Communicationとして成立した創作文指導だったか。

日記とか手紙の題材形式は生徒はまだ学習していないので，ただ書けばよいというものになってしまった。日記や手紙として書く方が生徒には書きやすかっただろう。Lesson 7　Akio Writes to His Friend in Japanで手紙文を指導したのでやらせてみたい。

② 指導方法の改善

ア．アンケートで４つの技能（聞く，話す，読む，書く）のどれに一番関心があるか尋ねたところ，「話す」80.9%と圧倒的に多く，次いで「書く」66.7%であった。発表への関心が非常に高いと言える。今後は口頭での発表を多くするなど書くことと話すことが緊密な関係になるような指導をしていきたい。

イ．また，もし書くとしたら，どんな内容で書きたいかを尋ねたところ，「日記」66.7%「手紙」42.8%「自己紹介」26.2%「物語」21.4%（複数回答可）であった。夏休みの課題は日記とも手紙とも判断がつかないものであったが，今後はなぜ書くのか，誰に書くのかなどCommunicationを意識した形式で書かせたい。

ウ．誤りに対してどう対処すればよいのか。自由創作文に関しては一切添削しないという方針は今後も変更しないが，教師側には誤りの分析と対処法，意欲との関係，評価，生徒へのフィードバックなどまだまだ研究不十分なところが多々あるため，今後の研究課題としたい。